

市民都市論

宮崎辰雄著

日本評論社 A5判 278頁

950円

“神戸”は大都市の中でも特に横浜と多くの類似点をもっているように思う。大阪という巨大都市に近接する大港湾都市。

著者、宮崎辰雄氏はその神戸市の市長である。昭和28年、41歳の若さで神戸市助役となり、以後16年間、原口忠次郎前市長の下で活躍し、一昨44年11月、市長に就任された。

宮崎氏は、これまでの都市論は抽象的理論においてはすぐれていても、政策志向性において弱かったと考える。本書は、このような政策不毛性をこえて神戸市が行なった、市街地改造ビルや工場アパート、ミニシティ、高速鉄道、海上都市、ニュータウンなど、都市づくりによって培われた現場からの体験的都市論である。「この一世紀、都市計画、都市財政、都市行政については、各専門分野からきまこまかく論じられている。しかし各専門分野を体系化し、都市づくりの体験をふまえて“都市”が論じられることは少なかったし、都市の本質である“市民”や都市のにない手である“自治

体”について論じられることはなかった。本書は、このような『哲学の貧困』をこえて、都市化の渦中で積み重ねてきた実践的政策論」でもある。

4つの章から成る。第一章「現代都市と都市問題」の中で著者の基本的な考えが述べられている。過去の都市政策の欠陥を明らかにし、今後進むべき方向が示されている。大都市に共通する諸問題の解決策を考えるにあたって教えられることが多い。理論のみに止まらず、神戸市では、「都市発展の方向、市民意識の実態をはっきりつかみ、もっとも効果的な処方箋を描く」ために全市的スケールの調査を積み重ねつつある。第二章から最後の第四章までは各論で、「都市空間の最適体系」・「都市経済の最適体系」・「都市社会の最適体系」という3つの標題の下に問題が整理され、かざらずに力強く、諸文献資料を豊富に使って多くの貴重な提言が示されている。たとえば次のように熱のこもった美しい言葉が見出される。

「アメリカのスラム・クリヤランスは大規模で、たしかに徹底している。しかし、そこに住んでいた貧しい人々を追い立てて近隣関係を破壊したという非社会性は高くそびえる高層ビルのかげに深くおとされている。都

市の文化水準をきめるのは、都市ビルの華麗さや高速道路の見事な曲線ではない。人間がどれほど自由に歩けるか、子供がどれほど戸外で遊んでいるか、自然がどれほど保護されているかという都市空間の社会性、すなわち人間性によってきまる。」

ここには都市のあるべき姿が端的に示されている。問題解決の手段は多少違って方向は神戸も横浜も共通だ。すぐれた“友人”の出現がうれしく思われる。<都市科学研究室 春田>

あとがき

これまで、調査季報で住宅問題があつかわれていなかったのをごんどもはく住宅問題の諸側面>を特集にしました。住宅の問題は、政治的、経済的、社会的に複雑にからみあい、間口も奥行きも広く、深く、その上、立場によって意見はかなりまちまちのようです。どの点にねらいを定めての特集にするか、という議論もかわされました。しかし、今回は、特定の視点からはいることを避け、総論的に<諸側面>ということにしました。さいわい、住宅問題研究会が精力的な討議を重ねておられるので、より深い問題の追及は、同研究会の今後の成果にも期待したいと思っています。

<松本>

調査季報

31

1971年9月30日

編集・発行——横浜市企画調整室都市科学研究室

横浜市中区港町1-1

印刷——有限会社 宮村印刷所

横浜市南区永楽町2-22

3